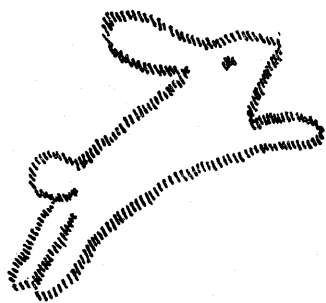


「おいしい」

蕪木寿江



「絨毯の上は、今夜食べようとして茹でておいたスパーゲッティと、買ってきたばかりの卵をみんな、なすりつけてしまいました。これでも怒ってはいけないのでしようか、幼稚園から帰って来ても外で遊びたいと言うので、又お散歩に連れて行って来たのに……、何が気に入らないんでしょうねえ——」「——、T先生は『絨毯は洗えばいいでしょう。生命に別状は無いでしょう』と、きつとおっしゃると思うわね。お母さん偉いわね。怒らないで……。あと少しの辛棒よ、Yちゃんこのところ随

分、わかってきたんですもの」「こうやって電話で話しているでもないじゃないんですの。自分のことを言われていると思うんでしょうか」と言って切れた。涙の声ではなかった。涙も出ない程、かすれた声だった。受話器を握ったまま置けなかった。

言葉の発達の遅れているYちゃんが、三月に東京から引越してきた。苦情の多いアパートでは子どもを叱ることも多く、少し位不便でも静かな処なら、「Yも話すようになるかもしれない」と、両方の親が建ててくれた、

と言っていた。

○大学の言語障害研究室のT教授からの簡単な紹介状を持ってきた。幼稚園には行かない方がいいが、弟さんも入園の時期だし、どうしても行きたいのなら、と前もって電話があった。今迄通っていた幼稚園の若い先生も一緒だった。「他の先生にはおんぶしないのに私にするんですよ」と愛情の籠ったまなざしでYとびったり並んで椅子に腰をかけて名残り惜しそうにしていた。

その幼稚園に入る前に保育園に行っていた。三才になるのに言葉が出ないので、早く集団の中に入れてもらいたいだろうと、人の勧めもあって泣き叫ぶのを無理に離しておいて来ると、一人で歩いて家に帰って来てしまう。又連れて行く、戻って来る、を繰り返しているうちに泣かなくなった。あとも追わなくなった。慣れたのだろうと思っただけで預けていたのだが、だんだん無表情になってきたのに気がつかなかった。(お母さんこそが唯一の安全基地であるのに) 下も年子で生まれて手がかったし……何しろ、焦っていたのが悪かったし、T先生を早く

知ればよかったと悔みながら話した。しかし、ここまではバス停で八つもあり、四十分はかかる。一年目は幼稚園バスが止るところまで自転車できた。しかし、このバスも始発から学生で満員で乗れないこともあり、二年目から三輪車で二人を乗せて一時間かかって通った。途中からサイクリングコースになるので、その土手でひと休みしながら帰ったり、弟さんを補助するときの自転車に乗せて前を走らせたりした。

お母さんは過労の為に歯の根を痛めてその手術で休むこともあったが、ここは自分の味方のようなほっとした表情の時が多かった。小さい身体なのに大きなYをおんぶしてみんなを眺めていたりした。先生方も、Yが望むようにかわるがわるおんぶをしては友達の中で遊んだ。

背中のYはぼーっとしていて生気がなかった。これが本当のYなのだ。裸足で走り廻っている時は、一見、活気があるように見えるが、不安で無理をしているのだから。冷蔵庫が好きで、牛乳を呑んだり、お菓子を食べたりした。Yの喜ぶことがしたいと思うので止めることは

なかった。

クラスの子ども達は、「おぼちゃん。Yちゃんがね、おはよう、って言ったよ」とか、「ゆきちゃん、って言ったよ」とか、空想と希望が一つになってよく話しかけていた。「ありがとう」と、お母さんも目を細めて笑うことがあった。子どもには本当に聞こえるのだらう。無心な子ども達にのみ声にならない会話があるのだ。

就学を一年猶予して兄弟で年長組になった。魔の七月が二回過ぎた。夏になると気分が解放的になるのか、暑いから窓を開けてあるからか、夜になると、あつという間に裸足で外へ行ってしまい、やっと探しても追いかけるのと逃げるし、田んぼの中に入って、ドロドロになって連れてきた。お店屋さんのコーヒを飲んでしまった。とか、七月はさんざんだった。

訪れて行くと、Yちゃんのご馳走が迎えてくれた。お皿の真中に小石が盛られ、その周りを二つ切りにした蕪が並び、楊子が挿してあった。「捨てる怒るんですよ。この頃、庖丁が使いたくて、高いじゃがいもみんな切

ってしまうので、それを皮をむいて又、料理するんですの。卵焼きもつくるけれど、お塩をいっぱい入れて食べられなかったり……。でも絨毯にはこすりつけなくなつて家の中もいくらか綺麗になったんですよ」と言われた。

二学期になるとトランポリンを独占して喜んだ。Yちゃんが乗っているとゆきちゃんも走ってきて手をつないで高く跳んだ。Yの力のあるジャンプについていけた。トランポリンの弾むあの空間は心地よく安全な所なのだらう。満揚げに時には声をだして笑っていることもあった。

O大の研究室にYについて行った。三月であった。帰り道、軽自動車の中で私がみかんを渡すと、甘ずっぱい匂いと一緒に、「おいしい」と、Yがはっきり言った。助手席に乗っている私は心臓がドキドキしてきた。大さわぎをしてはいけない、冷静に、と自分自身に言っかけて聞かせるのにやっとなった。お母さんが、「そう、おいしいの」と言った。弟のNちゃんが、「お兄ちゃんが、し

やべれるようになったら、いっぱい遊んで貰うんだ」と喜々として言った。「お兄ちゃんなんかいない方がいい」「お兄ちゃんは死んだ方がいい」と言ってお母さんを困らせていた弟なのだ。いつも監視人のように、お母さんがお使いに行っている時は見張っていないければならない。どんなにつらいことだろう——。運転しているお父さんが、ミラーを見ながら「Yちゃん、よかったね、おいしかったの」と言った。私は又、あの「おいしい」が聞きたくて袋の中からゴソゴソとみかんを取りだして、Yに渡した。息をこらしていたが、二度は聞けなかった。なによりも「T先生に会って話した」という安心感が両親の心であり、その両親と好きな自動車に乗ってゆったりとした気分だったのだろう。

それからは、お弁当の時に、「おいしい」という言葉をたまに聞くようになった。苺を食べる時に、「おいしい」と言った。友達がこの声を聞こうと、二つしか入っていない苺を一つ、一つしか入っていない季節はずれの苺を一つ、とYにあげては待った。夕焼けも好きで、暗

くなっていく山を見た時、「きれい」と言ったと言う。Yの心の中はどんなに美しいのだろう。今は話さなくても、きっと沢山の言葉が……それもきれいな言葉ばかりが楽しそうに並んでいるのだろう。

二人の卒園式には、仲よくなったお母さん達と、いつでも別れを惜しんで泣いていた。幼稚園の門の横にいてあるみなれた三輪車の後ろにいつもの小さい布を敷いてY、前にNを乗せて、自動車のしきりに走る中を一生懸命にこいで行った。

(神奈川・市ガ尾幼稚園)